

『孫太郎池』

八田の山奥の「谷内(やち)」というところに、直径が二間ほどの小さな池があります。

昔、この池のそばに、村の若者たちが集まって、話し合っていました。

「この池の中を通過して、向こう岸まで渡られるだろうか。」

「途中で、背がたたんほど、深いところがあって、溺れてしまうかもしれんぞ。」  
若者たちの中で、実際に、この池に入った者はいませんでした。

それは、大人たちから、「この池は、入ったら、二度とあがることのできない、底なし沼だから、ぜったいに近寄るな。」と、注意されていたからです。

若者たちの中で、『孫太郎』という若者は、みんなの話を、じっと聞いていましたが、「おら、この池の中に入って、深さを調べるぞ。」と言うと、みんなが止めるのも聞かず、どんどん、池の中へ入っていきました。『孫太郎』は、すぐ、膝まで水につかり、まもなく、肩まで水につかってしまいました。その時、『孫太郎』は、一度、みんなの方を向いて、元気よく手を振りました。「向かいまで、渡るぞ。」と言うと、さらに、池の中へ向かって進んでいきました。

やがて、『孫太郎』の頭だけが、やっと、水の上に見えていましたが、それも見えなくなりました。高く挙げた二本の腕が見えていましたが、それも、すっかり、池の中に消えてしまいました。それっきり、『孫太郎』は、二度と池の中から、姿を現しませんでした。岸で待っていた若者たちは、繰り返して、『孫太郎』の名前を呼んでいましたが、このことを、できるだけ早く、大人たちに知らせなくては…と、村に向かって駆け出しました。

若者たちの話を聞いた大人たちは、さっそく池へ駆けつけて、池の中を探してみましたが、『孫太郎』を見つけることはできませんでした。

それから後、「この池のそばを人が通ると、池の中から、『孫太郎』の悲鳴が聞こえ、池の真ん中から、手のひらが現れて、人を引き寄せろ。」といわれ、この池のそばを通る人は、誰もいなくなりました。

そこで、村人たちは、相談をして、池の前でお坊さんにお経をあげてもらい、『孫太郎』の霊を弔いました。それからは、『孫太郎』の悲鳴や手のひらが、池の中から出なくなりました。それから、この池は、『孫太郎池』と呼ばれました。

(八田町 伝承)

